

今、そういう形で続いておりますものですから、それを続けたいんですけれども、やっぱり受注する仕事なものですから、それがいつまで続くかというように、いつまでも長くそれをやるという努力もしつつ、いつかは必ず終わります、それは。そのいつかが終わった後の、やっぱりサードステージというのも考えないと、セカンドということで今お話が進んでいますけれども、その後、最後の10年みたいな、そういったところで、また私は今、何をしようかと思っているときに、中村さんのお話を聞いて、本当の自分がこれから人生で、何、めり張りつけて、生きて、やっぱり何をしたいかというのは今まだ模索中なものですから、サードステージで何をするかという、そのことについて、しっかりまた見直しも含めて考えたいと思っております。本当にありがとうございました

【松田】 どうですか、ほかに。いいですか。大竹さん、クラスメートの方です。大竹さんから見た中村さんのいいところって何ですか。

【質問者】 中村は、すごいファイトがありますし、いろいろなことにチャレンジしようという気持ちが非常に強い方で、いつも、今まで積み上げてきたキャリアにとどまらず、新しいことを開拓していくというところに、すごくバイタリティーがあります。それとまた、今、大学院で若い世代とつき合いがありますけれども、そういう方たちに対して、求められれば自分のキャリアを話すけれども、それをとりたてて自慢するでもなく、同じ、対等な目線で話していく。若い方たちともそういうふうにお付き合いされるところがとても彼女の魅力だと。

【松田】 大事ですね。立教セカンドステージ大学のスライドを出してもらっていいですか。何枚か前かな、よくわからない。それでいいや。その次の集合写真がありますね。立教セカンドステージ大学は、補足すると、50歳以上でしたっけ、今、50歳以上を対象の方にやっている立教のシニア大学ですね。毎年約100名の方が入ってくると。1年目が本科で2年目が専科ということで、私は3年前にあるきっかけでそこでゲストスピーカーで話したときに、教室の中で一番輝きを放って目立っていたのは中村さんだったんです。

おもしろいと思ったのは、通常のシニア大学というのはまさに生涯学習講座で、出て、おしまい。だけど、ここは全員ゼミに入るということと、単なる趣味だけじゃなくて、一般教養とコミュニティービジネス、高齢化という大きな3本柱があると。全部のテストが終わった後、レポートを書かなきゃいけないということと、修了論文を出さなきゃいけないということで、相当本格的なシニア大学。年間の授業料が30万円ぐらいかかっていると。見ていておもしろいと思ったのは、毎年行って話しているんですけれども、さっきあったように、男は結構自分のキャリアを語ろうとする人が多いと。1年目ね。2年目になると大体そこら辺が、何というか毒が抜かれるというか、かみしもが脱げるといいますかね。1年目の人とかで聞いてもいないのに俺は支社長だったとか何とか商社だという人もいますけれども、大体1年たつと、皆さん、半年ぐらいですかね、よいようにかみしもが取れてくるということです。すてきだなと思ったのは、夏合宿が清里でしたっけ。最終日がキャンプファイヤーとフォークダンスというのを聞いて、僕も入りたいなと思っています。臼井さんと中村さんに共通しているのは、集う場ということです。セカンドキャリアを始めるに当たって、いきなりのキャリア転換は難しいわけです。でも、2人に共通しているのは、集う場があったというのは、立教のセカンドステージであり、臼井さんの場合であれば丸の内3×3Laboみたいなところに集う場があるということでございますね。非常に興味深い話でありました。それで、栗原さんに対しての質問。じゃあ、臼井さんから行きましょうか。

【臼井】 栗原さん、スポーツマンですよ。野球ですもんね。私、実は麒麟さんの麒麟絆プロジェクトはものすごいよく存じ上げておまして。たまたまCSV系サロンみたいなところで提起している関係もあって、教材の1つにさせていただいているぐらいなんですけれども、実はここと野球が、私の中でどう結びついているのかよくわからなくて、栗原さんをひもとくと、野球と絆プロジェクトが転換点になって子供と地域社会の貢献に行ったり、どうだったんだろうというのが、すごく今、興味津々なんです。そこを教えていただければなど。

【栗原】 すいません、先ほどのシートを見ていただくように、私の説明不足で、慌ただしく説明してすいませんという。サッカーの写真を見ていただければ、これが全てという。ここですね。感動の場面が連続でした。被災地に行きますと、やはり子供たちの笑顔というのが最初のころ全然違って、やっぱり大人に気遣っているんでしょうか、全然心ここにあらずというか、でも表面はすごい元気だし、活動されているんですけども、そこを自分事と知ることは全くできなかったです。

それを、3年間で60億円のプロジェクトというところで、サッカー協会の方と一緒に企画しまして、こういう、やっぱり将来を担う子供たち、それもやっぱりスマイルという、本当の笑いというものです、是非つくり上げたいという大きな構想と、正直お金がいっぱいかかっちゃっているんですけど、これ、今でも3年間60億円ということだけでなく、継続してやろうということで、サッカー協会の方の御協力もあって、続けています。

その中で、本当は野球なんですけども、会社はサッカーだからとりあえずサッカーの路線でという中で、気持ちは同じスポーツというところですので、絆プロジェクトをやりながら、やはり子供たちというワードの中で、少しでも子供たちのお役に立ちたいと。主役は子供たちというところで、第2の人生を進めさせていただきたいとさらに思いました。

【臼井】 子供とは一家離散でも別にいい。(笑)

【栗原】 簡単な思いで、子供に愛情がないわけじゃないんですが、やはり特に被災地の子たちを見ると、うちの子たちは何て恵まれているになっちゃうので、そっちはだから早く自立してくれればということでしたから、就職した途端に、俺は好きなことをするぞというのは大分前から宣言していました。

【中村】 近くにハウステンボスがあるということで、さらにまちおこしプロジェクトとして産学官連携の何か具体的なプロジェクトとかは進捗しているんでしょうか。

【栗原】 この話になると、CCRC、先ほどの松田さんの話になるんですけども、いろいろ本当は、先ほど言ったように用務員のおじさんという感じで、野球部のグラウンドに出て、ボールボーイとかグラウンド整備をやるだけのつもりでいたんですが、それだけじゃ採用してくれないということで、何でもやりますと言っちゃったら、今、全国地方創生という中で、松田さんが提唱されているCCRCとかいう中の仕事も、市とか県とかと一緒にさせていただくようなことになっています。それで、今おっしゃったとおり、ハウステンボス等々あって、いかに、ですから地域を活性化するかというキーワードの中で、自分の活動がまた広がっているというのも事実ですので、そこも楽しみにしています。

【松田】 その話を補足しますと、さっき申し上げたCCRCというのは、Continuing Care Retirement Communityということで、アクティブシニアタウンの話ですね。もう1回、長崎国際大学のことを出してもらいたんですけども、そのアクティブシニアタウンをどこにつくるかという、今まではゴルフ場の近くが多かったと。ゴルフをやったのんびり過ごそうというんですけども、これから、かえって大学の近くがいいんじゃないかということです。なぜかという、多世代と触れ合うことがやはり健康の、生きがいを持つきっかけになる。年寄りばかり集まっても元気が出ないでしょうということと、学びというのはやっぱり人を元気にすることです。立教で僕は1回教えた後に、生徒として倫理学の授業に出たんです。倫理の授業って自分が大学1年のときに一般教養で、大教室で出たんですけども、極めて退屈だったと。大教室の後ろで突っ伏して寝ているしかなかった。けども、40代後半になって倫理の授業を聞いたときに、立教の先生が、何でも人はコンプレックスを持つのかということ、日本人のメンタリティーとアメリカ人、欧州人、アジア人で比較して話してくれたときに、非常に心にしみ入るものがあつたんです。つまり、18歳や19歳で世間のこともよくわからないし、働いたこともない子供と、ある程度、酸いも甘いも嗅ぎ分けてきた人になると、全然受け入れ方というか、しみ入るものが違う。つまり、学びは年をとってからのほうが楽しいんだと。だから大学の近くに住んで、もう1回学校に行きましょうと。

何で長崎国際大学と連携かという、非常に高齢化に関する関連性の高いものがあるわけです。健康栄養学科とか、薬学部とか、あるいは社会福祉学科とか。国際観光学科なんて隣にハウステンボスあるわけですからね。今、栗原さんと考えているのは、国際大学の近くにそういったアクティブシニアタウン、CCRCをつくって、そこに元気なシニアが集まって、もう1回大学で学ぶ。学ぶだけじゃなくて、自分の知見を生かしてキャリアアドバイザーをやると。元営業マンが営業って何だとか、あるいは海外赴任していた人が海外赴任って何だとか、エンジニアはものづくりって何だという話を学生にすれば、学生もありがたいわけです。

振り返ってみると、私みたいなバブル世代でいうと、およそ学生時代にビジネスマンの話を聞く機会はなかったですよ。今の大学はちょっと違いますけども、今の教育で最大の問題点はキャリア教育ですよ。小学生、中学生は塾に行って夜中まで勉強して、そして大学に入ったら面接の仕方、テクニックだとかおじぎだとか、そういうことばかり教えてもらって、働く論について全く学んでいない。だから、入社3年目で3割が辞める世の中になっているということだと、今日ここに集まった皆さんが働くって何だということを学生に教えれば、それは学生にとってこれほどありがたいものはないわけです。この話を福岡でしたときに、今の女子大生が聞きたいのは、肩肘張ったキャリアウーマンの話じゃないんだと。家庭に入るって何だとか、子供を育てるって何だといったようなことを聞きたいという、何も華麗なるキャリアの方々じゃなくて、どんな方でも若い世代に伝えられることというのはたくさんあるだろうと。そういった多世代が集うまちづくりを長崎でやろうということ、今、栗原さんとしているということでございます。

【黒笹】 栗原さんのお話の中でたびたび出てきたのが、地方に暮らしたいというか、そういう思いが募ってきたとかという話が随分あったんですけど、その源泉は一体何なんだろうなと思って、僕なんかも東京に60年もいて、いいかげんこのまちええやろみたいな感じで、よその土地を探したんですけども、栗原さんはそうじゃなくて、現役時代からどうもそういうところに住みたいという感じがあったみたいな、その源泉は何なのかなと思ひまして。

【栗原】 初対面の方から、私、会って話すと、「田舎どこ？」って最初に聞かれるんですよ。ところが、私自身はシティーボーイだと思っているんですが、大分ギャップがあるんですけども、やはりテレビドラマとか何か見ても、優しいおばあちゃんが田舎で迎えてくれるような、そんな場面とか見たりして、田舎への憧れが小さいころからありました。特に九州は1つの文化圏というか、あって、やっぱり随分憧れという言葉が今回も出させていただいたんですけども、小さいころから九州への憧れ、田舎への憧れというのがありました。

社会人になったら、やはり転勤族でいろいろなところに行きたいなど。都会志向じゃなかったんですよ。大阪に行って、また大阪の批判をすると怒られちゃうんですけども、10年間、バブルの時代を夜の商売ばかりやっていて、つろうございまして、さらにやはり田舎志向になったんじゃないかなと思います。

【松田】 では、栗原さんの長崎の話について、御質問や御意見ある方、いらっしゃいますか。

【質問者】 声がちょっと通らないかもしれませんが、質問させていただきます。長崎国際大学に関係されていると聞きましたけれども、長崎国際大学は外国人、留学生を受け入れているのですか。それが1つ。留学生は受け入れていますか。

【栗原】 よろしいですか。やっぱり200人弱いまして、全学生が201人ですから、1割弱はいます。留学生ですよ。

【質問者】 そうすると、授業は英語でやっているのですか。それとも日本語でやっているのですか。

【栗原】 ここがまだ学校の課題でありまして、今、やはりグローバル人材を育成しようという中で、授業も英語でという要望は強うございますけれども、なかなかそこまでは行っていないです。

国際大学の名の割には、実態は特に欧米の方の留学生も少のうございますから、中国、韓国、それからベトナムとか、最近ではインドとかいう広範囲なので、なかなかそういう英語だけの、皆さん御存じかと思いますが、立命館のアジア太平洋大学、自分の今度卒業したせがれが出たんですけど、そこは半数がほとんど留学生という中で、英語教育はかなり最先端を行っているということですので、長崎国際大学はまだそのレベルまで行っていませんので、かなり課題として今取り組んでいるところです。

【質問者】 栗原さんと松田さんの両方になるかと思いますが、CCRCで縁もゆかりもないようなところに行くというのはやっぱり抵抗がある人、特に高齢になればなるほど生まれ育ったところにずっといたいと思う人が多いんじゃないかと思うんですけど、たとえそこに大学があって、学びの場があってというのがあっても、なかなかそういう気持ちになれないんじゃないか。それから、じゃあ、それを克服していくとか、解消していく策として何かあるかどうかということをお願いです。

【栗原】 この辺は松田さんのほうが専門かと思いますが、私の思いとしましては、先ほどデュアルライフの御質問もあったと思いますけど、やはり体全部をどっちかに寄せるとするのはすごく勇気がいることかなと思います。ですから、まずそれを始める前に、事前に都市と地方との両方を楽しむことをされたらどうですかというのを、先ほどちらっとシートでは御説明させていただいたんですけども、今のところの満足度ももちろん認識して、そして、地方のよさ、要はお試しいいんじゃないですかね。そこで両足のどっちにバランスを置くか。特に元気なときは両方楽しめるとしますので、その中で最終章をどうするか、第3ステージというお話が先ほどありましたように、そういう中で変化対応していくと、ますます生活も自分の楽しみにつながっていくんじゃないかなと考えます。松田さん、お願いします。

【松田】 今の質問は、要するに縁もゆかりもないところに地方移住するのを、きっかけとなるのは何かということで答えると、まずは地方移住について言うと、Uターンですね。縁もゆかりもある人が帰るというのが1つだと思います。北海道から沖縄まで回ったんですけども、地元の高校、旧制中学や藩校といったところはまさに地元の最高学府があるわけです。だから、山形の米沢に行くとか興譲館だとか、福岡に行くとか修猷館だとか、高知に行くとか知事も県の部長もみんな土佐高校なんですけれども、その名門高校を出た人の多くが東京で働いている。地元に戻りたいという思いを持ちながら、何かきっかけがなくて帰れない人って結構いるんですね。例えば地元の高校の復権のために、活性化のためにあなたのキャリアを生かしてください、あなたのキャリアを活用しましょうといったような前向きなUターン動機が必要だと。これは特に男が面倒くさい生き物で、帰るのが都落ちと思っちゃうわけですよ。よい意味での免罪符というか、大義名分、錦の御旗が必要だということです。それから次がIターンです。Iターンというのは、栗原さんの時代でいうと、長崎に長年赴任して、お世話になった長崎に恩返ししたいということでIターンされたということですけども、僕が有望だと思うのは転勤族の移住です。例えば人気のある転勤する都市のベスト3は、札幌、仙台、福岡です。ほかの都市でいっても、支店長経験者、支社長経験者、長く赴任した人というのは、その都市に対して非常に思い入れがある。それなりの支社長や支店長をやった人は地元の経済界とかよくわかっている。人によっては市長だとか知事もよくわかっている。あと、さっきもあったように、お帰りのなさいと言われるぐらいの地元の人との人脈を築いているのであれば、Iターンというのが転勤族の、支社長経験者のIターンというのがある。そして3つ目、これは地方移住の最大のネックは奥様なんです。アンケートをとると、地方移住したいということで、過半数以上したいという気を出すのは男性。女性は3割ぐらい。なぜかという、既に地元にもママ友もいる、コミュニティもある、友達も地元にいるので、今さら地方移住して知らない人というのは嫌だなと。その積極的な前向きな解決策が、ハッピー別居。奥さんは東京にいて、自分は地方に行く。栗原さんは、奥さんは福岡ということです。実は私の周りにはこのハッピー別居が続々と増えている。そして、聞くとみんな夫婦仲がよくなりましたと。沖縄に行った人は、今、奥さんは東京に残しているんですけども、盆、暮れ、正月に帰ってくると。奥さんは季節のいいときに沖縄に来てくれると。

でも、3日問題といって3日目ぐらいから雲行きが怪しくなるらしいんですけれども、たまに東京に帰ると、妻がつくるみそ汁1杯がありがたいと感じるという、至言を残しているんです。あと、秋田に移住した人は、自分は盆、暮れ、正月に帰って、奥さんは春からゴールデンウィークの一斉に花が芽吹くころに来てくれると。孫やペットの写真を写メールですとか、ITでやりとりするので、極めてIT能力も高くなりましたということなので、ハッピー別居。卒婚というらしいですね。卒業婚。離婚するほど仲が悪くないんだけど、お互いの立場を尊重して別居するというのが前向きな解決策。どうでしょう。今日、この中で地方移住に興味があるという方、手を挙げてください。いいですね。どうですか、どちらに移住したいですか。

【質問者】 僕ですか。ちょっと日和っていて、奥多摩の空き家とか群馬県とか、まずはちょっと近いところ。

【松田】 近いところ。まずはね。いきなりの移住はやっぱり難しいでしょうね。

【質問者】 でなければ、女房の実家のある愛媛。だけど、高知にちょっと少し吸い寄せられていますけどね。

【松田】 なるべくいろいろなところを僕は経験すべきだと。だって、結婚と一緒にいきなりするわけじゃなくて、ちょっとおつき合い期間が必要なので、いろいろな方とつき合って、最終的に。どこに移住したいですか。

【質問者】 私も近場、あまり遠くもないので、田舎であれ、東京なものですから、奥多摩とか秩父とか、古民家の再生に首出してみたりとか。

【質問者】 私も昨年、会社を辞めたもので、そういうことをしたくて、今は地元のそういう老人というか、健康の活動に参加したりとか。行くのでも、溶け込まなければ意味がないような気がするので、そういう溶け込み方みたいなものを今ちょっと、いろいろなところに顔を出して、参加させてもらっているという感じです。

【松田】 大事ですね。ほかに移住したい方はいらっしゃいますか。

【質問者】 私はUターンですね。 【松田】 どちらが御出身。

【質問者】 群馬です。 【松田】 戻って、どんなことをしたいですか。

【質問者】 まだ具体的には決めていませんけれども、同級生もかなり残っていますし。

【質問者】 あとは、フォーラム的な集いというんですかね。それで、場合によっては行政というんですか、動かすような、圧力団体じゃありませんけれども、そういうサークル的な延長したものをやってみたいなどと思っています。

【松田】 地方移住、今、国も大きな政策として打っているんですけれども、どうでしょう、女性の中で地方に移住したい方はいらっしゃいますか。

誰もいない。まさにアンケート結果どおりの回答が現場でも得られたということですね。

でも、今、会場の方が言ったように、移住したら何か役割というか、担い手になることが必要だと思います。それは学校で教えるですとか、あるいは地域のベンチャーの担い手になるでもいいですけども。例えば去年、我々が東北でお手伝いしたときに、極めて高品質のリンゴがとれると。1個1,000円ぐらいで売れる、アメリカで10ドルで売れると。でも、その売り方とか海外輸出とかマーケティングがよくわからないということで、商社で働いていたとかアメリカに赴任していたような営業マンを呼び込もうというアイデアがあったということです。

いきなりこれをやると、得てして空振るのが、大企業の論理を押しつけて地元の人に嫌われるというのを我々はたくさん経験してきたので、であれば、1年間は地元の大学や高校と一緒に学びましょうということをやっていると。それがさっき言った大学連携型のCCRCじゃないかなということですね。

では、地方移住の話が出ましたけれども、まさに地方移住を率先垂範して、難関の奥様も一緒に行ったという黒笹さんに対して質問は、じゃあ、栗原さんから行きましょうか。

【栗原】 最初の質問でよかったなと思って、そのまま話の流れで、是非高知に移住されたときの奥様の一言、それから、された約束なんかありましたら、お聞かせください。

【黒笹】 僕は単身赴任でもいいよと言ったんですけど、「いや、パパがいないと生きていけないから」と。

【黒笹】 実は深刻な話なんですけど、3.11がありまして、うちの奥さんは東京のスーパーマーケットで食品を買えなくなったんですね。野菜も肉も卵も牛乳も買えなくなって、ずっと1年間ぐらい高知の野菜を、僕の関係で毎週とっていきたりなんかしていたものですから、そういう食の不安がそのときはすごく強かったんですね。移住したのが2012年ですから、2011年のただ中はまだ東京におりましたので、そういうのが多分背中を、福島くんも背中を押してくれたという感じだと思うんですけども、今になってみると、ママ友とかまだ東京に親しい人がたくさんいて、みんな何事もなく過ごしているわけですね。

「パパ、ねえ、何かちょっと早まったんじゃないの」という気持ちがあるうちの奥さんにもあるようなんですけど、でも、基本的にはやっぱりパパと一緒にいないと、一緒にいるというのが家族としての選択だったということと、それから子供がやっぱりまだ小学生だったものですから、中学受験をして、ちゃんと進学校に入っていて、高校まで大丈夫というところに入っていたのに、引きはがして高知に行ったという、学校の校長先生には、お父さん、気が狂いましたかと言われたぐらい、かなり過激なことをやったものですから、僕としても責任はあるんですよ。ですから、そういう意味では、不転校の決意で行きましたし、それから、先ほどから2拠点とか言っていますが、うちは退路を断ちました。東京のマンションを売りました。それで、半分の値段で高知のマンションを買って、残りの半分に今、働いていただいています。お金が自分で働くというのを僕、初めて知ったんですけど、ちょっと投資に関係した人に聞いたら、黒笹さんの年になったら黒笹さんが働く必要ないんですよ。お金が働いてくれるんですよ、知らなかったんですかと言われたんですね。確かに、多少リスクがあるんですけど、順調に働いてくれているので、年金の足りない部分はマンションを売ったお金の半分で今、回っています。世界中回っているんですけども、それでも小商いはやっていますけど、基本的には家族はそういう形でとりあえずは一緒に行って、ただ、これ、コツがあるんですけど、うちの奥さんに時々、年に3回ぐらいですかね、飛行機のチケットを渡します。それで、東京で1週間ぐらい放し飼いにすると、また元気になって戻ってきますので。うちの奥さんのお父さんはまだ千葉で元気に1人で暮らしていますので、そこに行ったり、妹が埼玉にいますので埼玉に遊びにいったりして、あと、高知では本人が満足できない美容院とか歯医者さんとかバーゲンとか、それを全部東京で楽しんで、また帰ってきます。1週間で元気になって帰ってきますので、これは必要なコストかなと思っています。

【中村】 私から2つあるんですけども、1つは、観光遍路というお話が出ましたけれども、外国人の旅行客誘致の試みとかは何かあるんでしょうかという点と、2つ目は、きっと会場の皆様も思われていることだと思うんですけど、私、『釣りバカ日誌』のハマちゃんの西田敏行さんに何度か機内でお会いしたことがある、とてもいい方なんです。必ずファーストクラスの5インチという一番小さなプレートに、自分の似顔絵を油性のインクで描いてくれて、1人ずつ乗務員に渡すような、とても素敵な方なんです。『釣りバカ日誌』のハマちゃんと、モデルである黒笹さんの共通点と、ちょっと違うなと思う点、何かありましたら、お知らせください。

【黒笹】 まず、前半の観光に関しては、お遍路ロードプロジェクトと先ほど言ったものは、外国人が入っています。基本的には若い人たちと、それから外国人の力を借りて、1200年の文化をもう少しシェイプアップして、若い人からすると、お遍路って基本にお金になるという感覚がないんですね、地元では。でも、それをちゃんと観光のビジネスにしていこうというのが僕の提案で、そのためにはいろいろな仕掛けと提案をしているんですけど、その中に、若いお姉ちゃんと外国人の力を借りようというのがございまして、これに向けてはいろいろとキャンペーンもやりつつ、イベントも仕掛けしているというのがあります。

ただ、これは全く将来的に、例えば世界遺産になるだろうとか、国のお金が少しお遍路に来たりなんかしていますので、地域が活性化しているので、その様子を見ながら進めていこうかなと。私自身は、偉そうなことを言うのにお遍路やったこともないというわけにいかないの、1回回っておけば、これはずっと使えるかなと。それから、お遍路ってとても楽しいですよ。まず体の調子が大変によくなりますし。途中で会ったお年寄りの御夫婦に、とてもぜいたくなお遍路さんですねと言われたんです。なぜぜいたくなんでしょうかと聞いたら、いや、お金もかかるし時間もかかるから、それがぜいたくなんですかと聞いたら、そうじゃないですよんです。歩けるということそのものがぜいたくなんですと言われて、私たちは本当は歩きたいんだけど、体が言うことを聞かないので歩けませんと。ですから、元気うち、歩けるうちにお遍路をするということとはとてもぜいたくなことで、あなたは恵まれているんですよと説得されて、ははあといって、お大師様に感謝しながら歩きますと言ったんですけれども、お遍路というのはやっぱり元気うちしかできない。やっぱり歩き遍路って遍路の基本なので、歩くことによっていろいろなものが見つかるんですね。

お寺には宝物は基本的にありません。御本尊はありますけれどもほとんどが見れないので、結局はお寺とお寺をつなぐ遍路道に宝物があると。それを歩けば見つかりますよというのがお大師様の教えでございまして、僕の枕元にお大師様があらわれて、そういうふうにおっしゃいましたので、是非遍路をしながら移住を考える。四国4県ございますので。それから、ハマちゃんとの関係。実はなぜ僕がハマちゃんと呼ばれるかという、『釣りバカ日誌』がビッグコミックオリジナルという漫画誌で始まるときの、僕、初代担当だったんです。ですから、あの漫画のストーリーを漫画家の人と、それから原作の人と一緒に考えたという、単なる初代担当だったんですよ。その後、漫画が究極のサラリーマン漫画だとかいってヒットして、映画にもなってという中で、黒笹ってハマちゃんのモデルなんだってみたいうわさが沸き起こりまして、いや、違う、僕、別にモデルじゃありませんよって、うちの奥さんはみち子さんじゃないし、子供も鯉太郎じゃないしって言ったんですけど、そんなことはないでしょう、モデルに違いないでしょうって何回も言われて、面倒くさくなりまして、わかりましたって言って、三十数年前にそういう時代がありまして、それは一旦終わったんですけど、高知に行ったら、それを見つけた人がいまして、黒笹さんってハマちゃんじゃないですかって言われて、さっきみたいな話になりました。

西田さんとは僕、ちょっとしか会ったことなく、スーさん役の三國さんとはじっくりとお話をさせていただきながら、もう亡くなっちゃいましたが、いろいろな話を聞かせていただきました。

トップニュースなんですけど、まだしゃべっちゃいけないかな。『釣りバカ日誌』の映画のほう、この秋から冬に第2部がスタートします。キャスティングはまだしゃべっちゃいけないんですけど、スーさんがものすごく意外な人ということだけ、予告しておきます。

【臼井】 お話の中で、土に近い高知、土が全くない、遠いのが丸の内というのがすごく印象に残っていて、自分のことを言って恐縮ですが、私、料理だめ、当然魚さばけない、それから増して釣りができない。土から全く遠いという感じの、地震のときにスーパーで買わなかったら死んでしまうタイプのほうなんですけど、こういう人って結構、そうは言っても多いんじゃないかと思っていて、こういう人はやっぱり高知で暮らせないのかとか、あるいはどういう楽しみ方があるのかとか、どうなんだろうなと。

【黒笹】 そうですね、僕は移住全般に言えることなんですけど、最後に人生をパッと変えたいかどうかと言ったんですけど、人生をパッと変えたい人だけが移住するべきだと思います。変えたくない、何となく今のままでいいやと思っている人はやらないほうが良いと思います。それは絶対失敗しますので。それで、逆に言うと、都会でしか生活できない人は、僕は都会を離れるべきではないと思います。

ですから、それは非常にシビアな現実も待っていますし、僕も移住する理由は100通り以上あると言ったんですけど、家族1つ1つに理由があると思いますし、それから、移住というのは結婚と全く同じです。例えばこの人と結婚しようと思うときに、この人のきれいなところだけ見て、いいところばかり見て、100%で。だけど、悪いところは必ずありますよね。それも全部知った上で、全ての情報を手に入れた上で、それでもこの人と一緒にになりたいと思うとき、結婚しますよね。移住も同じで、高知ってさっきから言っていますが、いいことばかりじゃないですよ。社会的なルールはめちゃくちゃですし、基本、規範的な意識が薄いと思ってください。外国なんですね。交通ルールもひどいですし、事故も多いし、青少年犯罪も多いし、教育も崩壊していますし、まちを歩けば酔っ払いばかりだし、悪いところを見ようと思えば幾らでも見えるんですよね。だけど、それも踏まえて、そういうことも知った上で、でも愛すべきところなんだなと思えば、僕はむしろそちらの高知loveのほうを、ですから、likeじゃなくてlove。loveの段階まで行って初めてその場所に移住ができると思ってください。結婚と同じだって、僕ずっと言っているんですけど。

それでもう1つ、やりたいことがわからなくて移住しないほうがいいですね。僕はやりたいことがはっきりあって移住したので、当然、どうしてかという、リスクマネジメントなんです。うまくいかなかったときに、だけど、あんたさ、やりたいことがあって来たんでしょ。そうしたら、失敗したっておまえの責任だろうということですよ。そういうふうに、うまくいかなかったときに自分が納得できる移住かどうかということが一番重要ですね。あのときこうすればよかったとか、そういうことは、僕の場合は退路を断ってきましたので、これはハッピーリタイアにせざるを得ない。ハッピーリタイアにする責任があるので、それだけの決意を持って来たので、気軽なことを言っていますが、それなりの覚悟で来ていますので、当然ですけど、じゃあ、高知でどうやって生活するのかといったときも、年金と、それから、ほぼ年金と同じぐらい大学からお給料をもらえるようになりましたけど、それでも、それ以外にも県のアドバイザーとか、講演も非常に多くて、そうですね、月に5本ぐらいは講演をやっている、レートは安いですよ、安いんですけど、それからミニ商社みたいな仕事もやっています、6月から仁淀のアライを新橋の鮎正っていう、月の売り上げでいうと180万円ぐらいですかね、毎日飛行機に乗せて朝一便で送ってまして、10%のマージンなので月に18万円から、少ない月で12万円ぐらいですかね。

小商いをやりつつ、生活費を稼いでおりますので、雑食性のリタイアメントライフという感じでしょうかね。

【松田】 ありがとうございます。

ちょうど黒笹さんとお会いしたのは、高知の移住の推進委員会の委員を私、やっています、そのときの会で黒笹さんの発言が全て自分の中に腹落ちすることばかりだったので、それ以来のおつき合いを続けているということです。あと、今日のもう1つのやりたいことということで、皆様のお手元に「故郷」のメロディーで覚える世界の挨拶、ありますか。これは中村さんが現に取り組まれていることなので、せっかくなのでこの場でやってみましょう。唐突感ありありなんですけど。

【中村】 唐突感ありありですね。でも、皆様、すごく深いお話の連続で、アイスブレイクの1つとして、これは豊島区で後期高齢者の方相手にミニ講座としてやっていた。2020年東京オリンピックを目指して、今、日本を訪れている外国人の方って英語圏の方たちだけじゃないんです。外国人の方が道に迷っていると、皆さん、すすすつと見て見ぬふりして通り過ぎる。何かしてあげたいんだけど、英語が苦手って。英語じゃないんです。先ほどお話したように、タイ語だったり、マレーシア語だったり、インド語だったり、ラテン系の、フランス語、スペイン語だったり、それを、こんにちは、さようなら、ありがとうだけでも言える自分を目指しましょうと、75歳以上の方に向けて知的好奇心を刺激する講座を、私、開発したんです。それで、皆さんもちょっとやってみていただきたいなと思っていて、メロディーはチーチーパッパじゃありませんよ。唱歌の「故郷」のメロディーに合わせて、こんにちは、さようなら、ありがとう。

皆さん、最初からできないと思いますので、とりあえず唱歌の「故郷」、皆さんのふるさとを思い浮かべて、小川のせせらぎとか、昔仲よかった友達とか、思い浮かべながら1番だけ歌ってください。その後、私がこんにちは、さようなら、ありがとう、やりますので、口ずさめる方は口ずさんでみてください。よろしいですか。これ、3拍子なので。アイスブレイクです。

【松田】 ありがとうございます。高齢社会フォーラム、長い歴史の中で、分科会で歌を歌うのは初めてになります。

じゃあ、今日の分科会を振り返って、総括をコーディネーターとしてしたいと思います。私のスライドをお願いします。アイスブレイクをもう1回したところで、今日の振り返りということです。まず、今日、皆さん、思ったのは生き生きとしているということです。残念ながら、セカンドキャリアで生き生きとしていない方もいるということで、これは数年前のNHKの「クローズアップ現代」の中で、団塊世代パワーが地域を変えるというときに、ゲストで出たときに、実際に地域で輝けない方々というのはどういう人かというのを類型化したんです。

実際にセカンドキャリアに失敗してしまった人に出演を依頼したんですけれども、断られまして、NHKが誇るエキストラが迫真の演技をしてくれたと。これですけれども、過去自慢、俺は何とか物産にいたとか、部長だったとか言う人は大体だめ。あと、口は動くけど手が動かない。手は動くけど足が動かないという人。この方、一般のエキストラなんですけれども、当日のロケであまりにも嫌味な演技がうまくて、本当にみんなから嫌われちゃったっていうぐらい。

地域で失敗するダメな方

過去自慢

口は動くが手が動かない

◇空振る講演テーマ
◇共感される講演テーマ

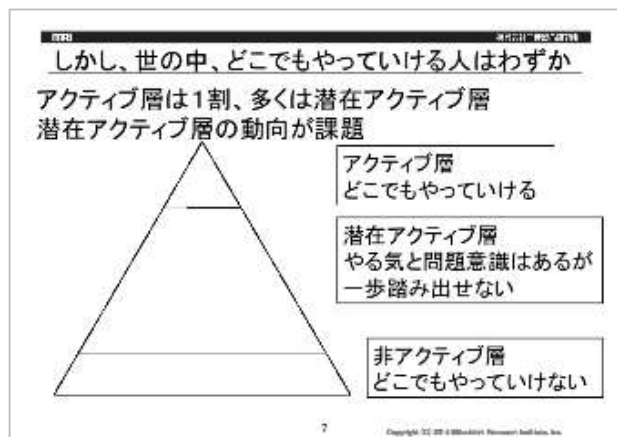
セカンドキャリア・デビューのポイント

- ×過去の自慢話ばかり
- 今、何かに夢中な人
- 今、汗をかいて恥をかいている人

☆セカンドキャリアは
過去を語らず今を語る

そして、今日、教えること、伝えることが大事だと言いましたけれども、我々、仕事の中でシニアが学生向けに何かを教えるということを結構やるんです。けども、アンケート結果を見ると、評判のよいものと評価の低いものが極めて明確になる。どういうテーマが評価が低いのか。代表的なテーマ。君たちに伝えたいこと。これが評価が低い。一方で、評価が高いのは何かというと、君たちと一緒に考えたいこと、君たちと一緒にやりたいこと。これは何が違うかというと、主語が違うんですね。主語が、君たちに伝えたいことは、俺が、私が。けども、君たちと一緒に考えたいことというのは、主語はやっぱりweになる。みんなで考えよう、みんなでやろうと。だから、セカンドキャリアデビューの中で、相手に対するメッセージというのは、やっぱり主語がIではなくてweであることが大事であるということ。過去の自慢話ばかりじゃなくて、人気があるのは今何かに夢中で、汗をかいて、恥をかいている人。つまり、セカンドキャリアを、過去を語らず今を語る。今日のパネリストの方、皆さん、今何かに夢中な人だと思います。そして、この3つですね。セカンドキャリアの鍵って、3つのキーワード、WillとCanとMustということ。Willというのは、やりたいこと。Canはできること。Mustはしなければならないこと。これが一致できているかということです。これが曖昧だとなかなかうまくいかない。さっき、移住にしても何にしても、やることが明確かどうかということが大事だと。

そして、今回のテーマを考えるに当たって、私は世の中ってこういうふうになっているんじゃないかと思う。ピラミッドでいうと、上位10%や20%はどこへ行ってもやっていく人です。既に一步踏み出している。一方で、下位の10%や20%は、やっぱりどこに行ってもやっていけない人だと。それは本当に健康の、体のぐあいが悪いとか、あと、社会性に欠けるとかあるんですけども、問題なのはこの分厚い中間層です。今日ここに來ている人は既に一步踏み出している方。家から出ている。壇上にいる方はさらに一步踏み出している方なんですけども、実は皆さんの同僚やご近所の方でも、こういうことに興味があるんだけどなかなか一步を踏み出せない方が多いと。ここの人たち。これから社会的に最大のリスクは、この分厚い中間層がどんどん、生きがいややりがいや社会参加をしなくて、下に行っちゃうことが一番リスクです。病気になって、鬱になって、孤立して、医療費がかかる。なるべくこの分厚い中間層を上のアクティブ層に踏み出す、持っていくことが大事だと。ですので、今日ここに集まった方々はアクティブ層です。ですので、真ん中の潜在アクティブ層の方をどんどん誘って、一緒にやろうよということが大事ではないかと。例えば、こういったことで丸の内プラチナ大学ということで進めているというものがあります。それから、去年、立教のセカンドステージ大学の学生を高知に連れていったと。高知大学で学んで、地方の課題を勉強して、若者移住者と交流したということです。冬が一番寒い時期に行っちゃったんで、南国土佐だと思ったらみんな風邪ひいて帰っちゃったんですけども、こういったことも取り組んでいる。



そして、今日、こういう話をしたときに、いろいろなところで話すんですけども、会場によって雰囲気が違う、リアクションが違う。いい会場だと、やろうぜ、頑張ろうぜとなるんですけども、いまいちな会場に限ってこういう反応がある。否定語批評家症候群というのは、できない理由をロジカルに言って得意になる。それは難しい、制度が違う、あとはいかななものかと言う人。いかななものかと言っても何にも解決にならないですよ。いかななものかって、英語で意識すると、I have no ideaということなんです。否定、批判はいいんですけども、対案、代案を出すことです。対案、代案を出す。これを心がけたい。一步踏み出せない。

それから、やったもん負けになっちゃうところがある。本当はやったもん勝ちにならなきゃいけないんだけど、ちょっとした失敗するとたたかれるというのも、知らなきゃいけない。それから、居酒屋弁士という、これは酒の席では雄弁なんだけど、こういうところに来ると急に黙っちゃうという。終わった後に居酒屋で「何だよ、さっきの三菱総研の松田の話」とか言って盛り上がっちゃう。東京はよく新橋や神田にそういう人たちがいます。僕は居酒屋弁士は悪いとは言っていない。いいこと言っているんですよ、リラックスしているから。要はそれを実行しましょうということですね。じゃあ、今日のまとめということで、今日、参加した人の中には、今日の分科会を聞いてレポートを書かなきゃいけない、会社に報告しなきゃいけない、ブログに書かなきゃいけないという人がいたとすれば、このページを見て、6つのポイントにそれぞれ自分のコメントを書いていくと、立派なレポートができて上がるので、とても大事な資料なんです。

1. 否定語批評家症候群

2. 一歩踏み出せない症候群

3. やったもん負け症候群

4. 居酒屋弁士症候群

◇失敗しないセカンドキャリアデビュー

1. 人生二期作・二毛作
2. アクティブシニアは過去を語らず今を語る
3. Will, Can, Must の明確化
4. 第二のモラトリアムが必要
5. 集う、磨く、気づく
6. 一歩踏み出す勇気

まず、人生は二期作・二毛作という考え。二期作というのは挑戦、二毛作というのは全く新しいことを始める。そして、その中で大事なのは、過去を語らず今を語るということ。何かに夢中になるということ。そして、WillとCanとMustの明確化というのは、Willというのはやりたいこと、Canというのは自分ができること、Mustというのはやらなきゃいけないこと。実はなかなかこれが一致している人はそういないということです。

じゃあ、それに当たって、誰もができるかということ、そう簡単ではない。僕が思うのは、よい意味での助走期間、準備期間、第2のモラトリアムが必要だということ。もう1回、思春期。もう1回、尾崎豊を経験するような、ちょっとした助走期間が必要。第2のモラトリアム。それは、例えば臼井さんで言えば、3×3Labo、丸の内集まった、あるいは中村さんで言えば、立教のセカンドステージ大学で学んだというのが、助走期間であったと。モラトリアムであったと。自分は一体何をやりたいんだということを気づく場になったということです。

それが5番目に書いてある、集うということ。そして、磨くということと、気づくということだと思います。

最後に、大事なのは一歩踏み出す勇気だということです。我々のような仕事をしていると、一歩踏み出せないことというのはあるわけです。それは、調査や提言、コンサルティングの仕事をしていると、ここはこの試算だけでも、これを書くと、いや、実は松田さん、それを言ったら社長のメンツが丸潰れなんで書かないでくださいと。これを書くと、省庁間のあつれきを生むので、言わないでくださいということで、ちょっと鬱屈した思いを持ちながら1行消すだとか、一言言わないということは実は結構ある。実はその一歩踏み出せないということは、今、私たちが生きているこの空間の中にたくさんあるわけです。振り返ると、それは5年前の今ごろだったかもしれない、10年前のあのときかもしれない、あるいは昨日のあのときがそうだったかもしれないということで、そう考えると、一歩踏み出すということはとても大事であると。振り返って、あのときやっておけばよかったと思うことほどもったいないことはないということで、振り返ってみて、2015年7月31日がターニングポイントだったということにしようではありませんかということです。

それは、1人がやったところで小さな一歩かもしれませんが、今日、集ったこの皆さんが一歩踏み出せば、活力ある高齢社会に対して一歩踏み出すきっかけになるということで、そうした準備ができれば、セカンドキャリアも失敗しない、夢のあるセカンドキャリアになると思います。

今日のパネリストの皆様の報告、それから、皆さんの質疑応答が、皆さんの新しい気づきや一歩踏み出すきっかけになれば、パネリストとしてこれほどうれしいことはないと思います。

御清聴、どうもありがとうございました。